Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No.109

令和２年度 特別展

渡邊半蔵家

ー徳川を支えた忠義の槍ー

愛知県指定文化財
絹本著色 渡邊半蔵守綱像 ［守綱寺蔵］

目次

令和２年度特別展 2〜3
渡邊半蔵家 ー徳川を支えた忠義の槍ー への誘い
又日庵の湯治 4
民具調査だより-31 豆粕削り機 5
♀縄文人の♥結婚相手♂ 6〜7
ー下切町 大砂遺跡の唐草文系土器についてー
復元された戦国時代の山城、足助城 8
足助伝統的建造物群保存地区に残る文化財 9
忘れられた「足助町道路元標」
国産自動車創世期と家族の記憶 10
ー歯車の技師・若松辰治氏とその家族ー
オンライン授業の可能性 ー博学連携ー 11
省営（国鉄）バスの記憶 12

ISSN 0919 - 0120
202012 No.109

令和２年度特別展

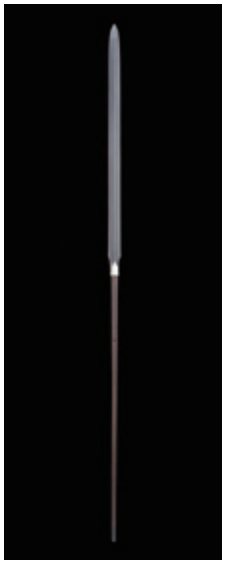
渡邉半蔵家への誘い

―徳川を支えた忠義の槍―

はじめに

江戸時代の寺部を治めた渡邉半蔵家（以下、渡邉家）。初代守綱（1542 ～ 1620）は、徳川家康から「槍半蔵」の名を賜る武功と信頼を得て、晩年には尾張徳川家初代徳川義直に仕えることを家康から命じられたと伝わっています。

以後、歴代当主は万石以上の知行地をもち、幕末まで尾張藩の要職にあって尾張徳川家を支えてきました。



大身槍　銘下坂
渡邉家伝来　個人蔵
徳川美術館寄託

令和２年は守綱没後 400 年でした。また来年は、裏千家 11 代家元・玄々斎宗室の実兄で幕末を代表する武家茶人でもあった 10 代規綱（又日庵。1792 ～ 1871）の没後 150 年を迎えます。

時宜を得て開催される本展では、新発見を含むさまざまな資料をもとに、渡邉家の実像や職務、寺部を舞台にはぐくまれた文化について、幅広く紹介します。

その先触れとして、ここでは本展の内容を構成する資料を取り上げ、準備の一端をご覧いただきます。

特別展準備の裏側①―館外資料の調査―

渡邉家の歴史に関しては、これまで旧編『豊田市史』第２巻、『豊田史料叢書』渡邉家関係各巻、『渡辺守綱公顕彰会叢書』第１～ 17 集等により紹介されてきましたが、近年では新たな事実が紹介されることは少なく、一部では「同家に関する新たな資料はない」ともされていました。

こうした状況で特別展を構成する場合、館蔵資料をもう一度丹念に分析する一方で、あきらめずに館外に所蔵されている資料を広く捜索する作業が必要となります。

今回は、東京都豊島区の徳川林政史研究所に所蔵されている資料群「渡邉半蔵家文書」を実見することから、館外資料の調査に着手しました。この資料群は、先の旧編『豊田市史』編さん過程で部分的に参照されたほか、一部の研究で使用されるにとどまっていました。

渡邉半蔵家文書　留帳
徳川林政史研究所蔵

調査の結果、この資料群が約200年間に及ぶ記録を含み、分量としても膨大で、同家の歴史をひもとくうえで不可欠なものであることがわかりました。

同資料群は、主に「留帳」「御届留」で構成されています。

140 冊余りが残されている「留帳」は、寛文 13 ～文久４年（1673 ～ 1864）の各年に渡邉家で作成されたもので、主に同家の対外的な交際に関する事実を書き上げています。例えば、将軍家や尾張徳川家に対して定期的に献上した物品とその経緯、これに対する礼状の写し、さらに御三家・幕閣・寺院に対する付け届け等が克明に記録されています。

このなかには、「三州御在所之生鮎」、つまり寺部の矢作川で捕れた生の鮎を尾張徳川家に献上し（初見は元禄８年７月）、将軍家にも９月に干鮎を献上していた事実が書かれています。

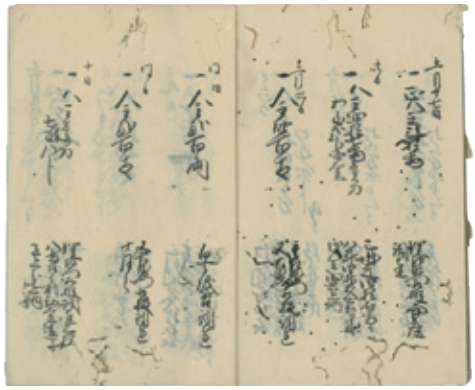
鮎は、渡邉家の中心的領地（在所）であった寺部を象徴する物品であったようで、19 世紀にいたるまで献上品であり続けました。「家康から拝領した地を統治している」ということを献上先に示す記号的な役割を果たしていたのでしょうか。

複数年次にわたる冊子となっている「御届留」は、延享元～安政４年（1744 ～ 1857）の７冊が残存しています。主に尾張藩への諸届を写したもので、渡邉家当主、同家家臣、同家に付属された武士「百人組」の行動を記した貴重な資料です。

本展では、これらの文書資料や、渡邉家に伝来した「大身槍　銘下坂」（個人蔵、徳川美術館寄託）等の館外資料をご覧いただく予定です。

特別展準備の裏側②―館蔵資料の調査―

館外資料の調査と同様に重要なのが、館蔵資料の再検討です。その時々の展覧会で設定される問題意識によって、館蔵資料に対する焦点の当て方が変化するこ


金銀受取覚帳　天保 13 年

とがしばしば起こります。同じ資料であっても、見方・取り上げ方・展示の仕方によって、語る内容が異なってくるのです。

しかし、より初歩的な失敗もあります。「ああ、こんな資料が郷土資料館に所蔵されていたのか」という、館蔵資料の見落としです。開館以来 50 年以上にわたる資料収集の成果ゆえ、としてしまう訳にはいかない、学芸員のミステイクです。

私の場合、館蔵資料「月並御入用調帳」「金銀出入覚帳」の２点についてが、これに相当しました。

一般に大名家等の上層武家は、毎年秋の年貢米売却益金を主な収入としていましたが、支出は１年を通して発生します。従って、何らかの借入を行うことが財政運営上必然となっていました。渡邉家（大名家ではないが、これと同等規模の知行を有していた）の場合はどうであったか、気になる点でした。

渡邉家の財政については、ほとんど手がかりがなく不明でしたが、これらの資料から江戸時代後期の年間支出・収入を部分的に検討できました。

天保 14 年（1843）頃の年間支出額（試算値）は金 3,600 両弱。このうち約４割が渡邉家家臣への給与支払い及び同家屋敷維持費、約３割が尾張藩からの賦課への対応費でした。もっとも、この金額は固定的な費用のみで、商人等からの借入金・調達金の返済や利払い、突発的な普請費用等を勘案すれば、実際の年間支出額はこの数倍の規模であったことは容易に想像できます。

対して、同時期（天保 13 年）の年間収入額は金 9,650 両余。このうち約５割が商人等からの借入金・調達金で、約４割が年貢米（麦）の売却益金でした。

借入金・調達金によって年間収入額の多くが占められている点は、江戸時代後期における上層武家の財政としては典型的といえるでしょう。一方、貸し手から見れば、以前から渡邉家と長期的に取引できていたとすれば、安定的に金利を稼げる顧客として同家を認識できていた、とも考えられます。

館蔵資料の慎重な検討よりも、館外資料の調査に心ひかれていた自分に対し、館蔵資料から「灯台下暗し、のたとえもあるぞ」と一喝された思いです。

おわりに

資料の重要性に気付かされることばかりであった本展の準備を進めるうちに、ふと大学時代の恩師（藤田貞一郎先生）との思い出が浮かんできました。私事で恐縮ながらひとつご紹介します。

他大学の大学院に進学後も、私は母校の藤田研究室にお邪魔して文献を講読し、帰途に京都駅前の酒場で大杯のビールをご一緒することが習わしとなっていました。全く、不良な大学院生でした。

酒席での話題は、ふたりが専門としていた日本経済史・経営史研究に関することではなく、先生がこれまでに出会った人物・資料・音楽・芸術・思想に関することがほとんどでした。

定年退職を目前にされた先生は、ある時、杯をあげながらこうおっしゃいました。「人生は、出会いだと思うなあ。どんな人と出会うか、どんな資料と出会うか。これで（歴史学に携わる者の）人生は決まるんだよ」。

先生が長逝されて５年余り。今回、次々と資料に出会うことは実に不思議な経験でした。私が資料に呼び寄せられている、資料が私に出会ってくれている。このような感慨を抱き、先生の言葉を反芻しています。資料の数々が発する、声なき声を聴いて展示を構築すること。学芸員の仕事の醍醐味であり、手腕の問われるところでもあります。本展にお越しいただき、皆様からご意見を賜り、渡邉家関係の資料とさらに出会えることを願っています。　（倉林重幸）

会期：令和３年１月 30 日（土）～４月 11 日（日）／月曜休館（ただし、祝日は開館）
開館時間：午前９時～午後５時（入館は午後４ 時 30 分まで）
会場：豊田市郷土資料館　第１展示室・第２展示室
観覧料：一般 300 円　高校生・大学生 200 円
※中学生以下、70 歳以上、豊田市在住・在学の高校生、障がいのある方及びその介護者１名は無料（要証明書等提示）

＜関連イベント＞

■ギャラリートーク（学芸員による展示解説）
日時：令和３年１月 30 日（土）・３月 20 日（土）
４月３日（土）各午後２時～２時 30 分

■とよたオンライン公民館（Zoom 会議）との共同企画「渡邉半蔵家の日！」
日時：令和３年２月 21 日（日）午前 10 時～
※関連イベントの詳細は、決まり次第郷土資料館ホームページ等でお知らせします。

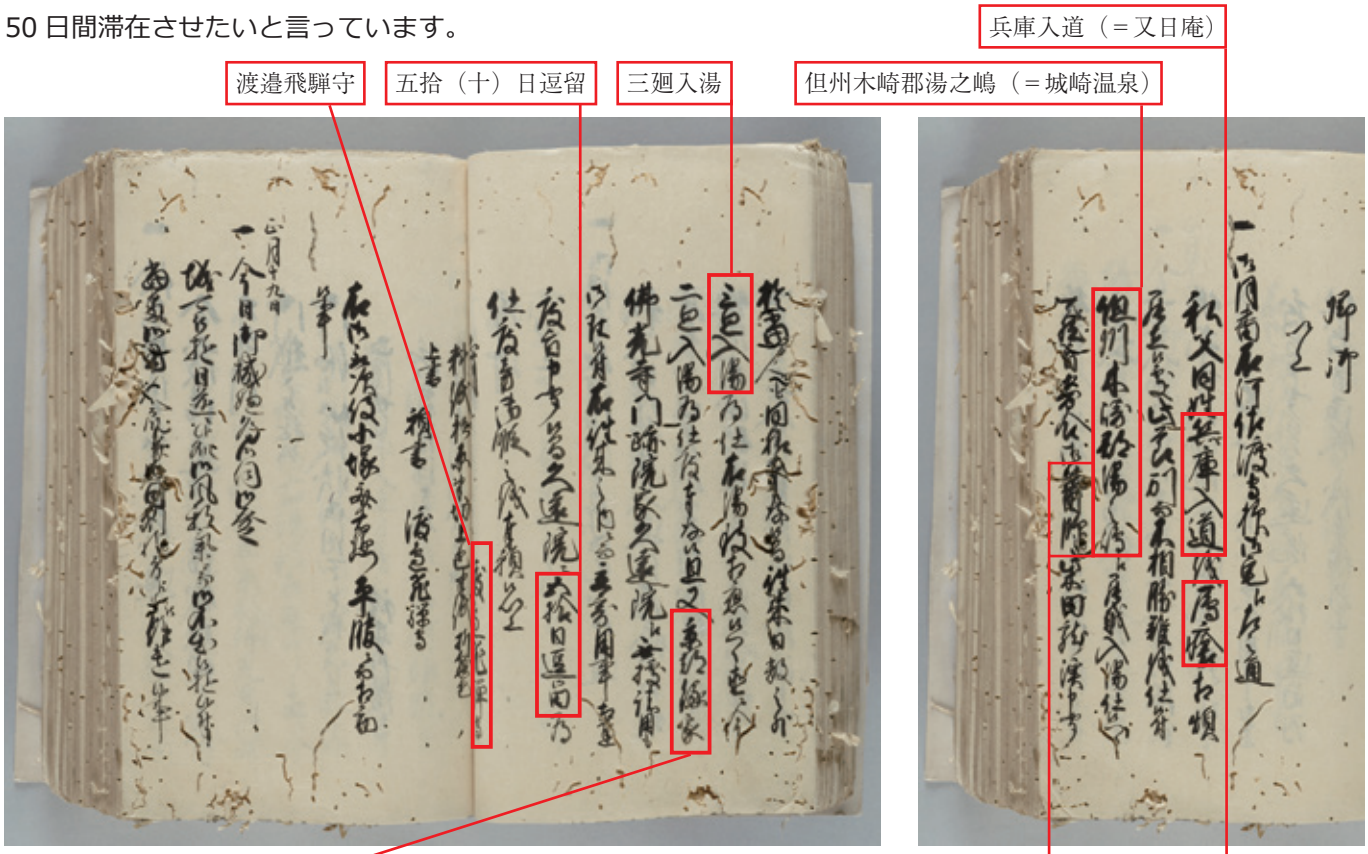
又日庵の湯治

特別展「渡邉半蔵家」の調査を進める中で、渡邉家の留帳（徳川林政史研究所蔵）に、当主の湯治に関する記載をいくつも見かけました。

尾張藩に仕える渡邉家では、当主や隠居した前当主が自己都合で名古屋を離れるときは藩に届け出なければいけません。これらの湯治の記載は、その届出を控えとして写したものです。こうした、いわば「休暇届」を提出するのは現在の社会と変わりませんが、当時は行先や理由まで詳しく記していました。

ここでは、安政７年（1860）に、又日庵（10 代規綱）の息子である 11 代寧綱が提出した、又日庵の但馬国城崎への湯治の届出を紹介します。

内容は、父の「雁瘡」（皮膚の湿疹など）が治らないので、医師の勧めもあり、城崎へ湯治に行かせたいというもの。往来に要する日数のほか、「三廻り」（21 日間）、「二廻り」（14 日間）滞在させ、さらに、京都の縁家にも 50 日間滞在させたいと言っています。



（安）政七申歳（留帳）　徳川林政史研究所蔵

また、又日庵は、文久２年（1862）にも「疝癪」（胸・腹・腰などが急に痛む病気）を理由に湯治に行っています。このときは、既に届け出た日数のうちで、帰りに伊勢神宮に立ち寄りたいと願い出ています。自ら「自由ヶ間敷儀」ではあるけれども…と言っていますが、隠居の身とはいえ、確かにわがまますぎるでしょうか。遠慮している様子が伝わります。

古文書や古記録などの史料を見ていて面白いと感じるのは、形式的な文面の中に、その人物の人間味あふれる部分が垣間見えたときです。

現在の城崎温泉

渡邉家の殿様が通った城崎温泉がどんなところか気になり、この秋、私も訪れてみました。１泊２日の短い湯治でしたが、確かに「雁瘡」には効果がありそうでした。

（山田佳美）

豆粕削り機 まめかすけずりき

大豆粕削り機・豆粕削り機・豆板削り機・豆玉削り機等の呼称があります。

明治の後期から昭和 10 年代後半まで、旧満州から大豆油を搾(しぼ)ったあとに残った締滓(しめかす)(〆粕)である大豆粕が主に桑畑の肥料として大量に日本に輸入されました。そもそも、なぜ大豆粕が輸入されることになったかというと、明治 39 年(1906)、日本は「南満州鉄道株式会社」(満鉄)を設立することとなり、その経営基盤を確立させるため、鉄道沿線で豊富に栽培されていた大豆の輸送を満鉄事業の主体とすることを考え、大連に「農事試験場」「中央試験場」を建設し、大豆の利用研究を進め、大豆三品(大豆粕、大豆油、大豆)の輸出を始めたことによります。日清戦争後は日本の経済界も旧満州に進出して、大豆油からマーガリンを作ってヨーロッパ諸国に輸出し、大豆粕は日本に肥料として輸出されました。桑畑や稲田の有機肥料として広く用いられた大豆粕も、大正末期から普及した硫安のため肥料用としての役目をうばわれ消費は後退しましたが、昭和 6～7 年(1931～32)頃になると、牛馬の飼料としての研究がなされ販路を復活させます。

油を搾った大豆粕は、直径 60cm、厚さ 10cm 程の硬い円盤状に圧縮され日本に運ばれました。丁度軽自動車のタイヤくらいの大きさで中心に10cm 程度の穴があり、片面には長方形の押印がありました。重量は 5 貫(18.75 kg)とも 7 貫(26 kg)ともいわれており定かではありません。当時の相場で差異がありますが、普通米 1 俵と大豆粕 5 枚が替えられたそうです。農家ではこの大豆粕を斧(よき)で割ったり、鍬で削り細かくし、肥料にするには削ったものを天日に干してからさらに台唐臼で践(ふ)みはたいて砕きました。牛馬の飼料には、沸騰した湯に浸したものを給餌しました。

豆粕削り機は重労働であった硬い大豆粕削りを楽にするために発明されたもので、円盤状の大豆粕を削り機に立てて挟み込み、T 型の押し手を下に強く押さえながら前に押し出す動作を繰返します。押し手の前方にある爪により、大豆粕は前に回転し、上向きに固定された刃によって外周面から順次削られる仕組みになっています。削り機は肥料屋さんの持ち物か村の共同のものであったので、施肥を行う 5 月から 6 月には使いたい人で混み合って朝早くから順番を取りに出掛けなければならなかったようです。

■ 豆粕削り機　W366　H673　D1003　[石丸式]

■ 豆粕削り機　W367　H690　D1060　[日之出印]

石丸式と日之出印は大変似ていますが、下部の台の形状が異なります。

大連の倉庫に山積みされ、船へと運ばれる大豆粕。旧満州全土で生産された大豆粕の 8 割が日本に向けて輸出されました。…圧縮された大豆粕の重量を 20kg としても、これを 3 枚から 4 枚担いで運ぶ姿は現代人からすると超人的な体力に思えます。　〈当時の絵はがきより〉

(東海民具学会 岡本大三郎)

♀縄文人の♥結婚相手♂

―下切町 大砂遺跡の唐草文系土器について―

奇妙な文様、奇妙な名前の土器

唐草文と言うと、一般的に、古代オリエントから中国を経て日本にもたらされた、植物文様を意味します。ここで紹介する唐草文系土器は、そのような唐草文には関係なく、単に似ているから、という単純な理由で命名された、縄文時代中期後半（５千～４千４百年前頃）の、信州南部に多く見られる土器の名称です。

唐草文系土器とは

唐草文系土器の特徴は、その名の由来でもある胴部を中心に描かれる大柄の渦巻文にあり、渦巻文の余白は、棒で引いた直線で埋めます。大柄の渦巻文様のルーツは東北地方南部にあり、北陸・信州北部を経て、信州南部にもたらされたと考えられています。

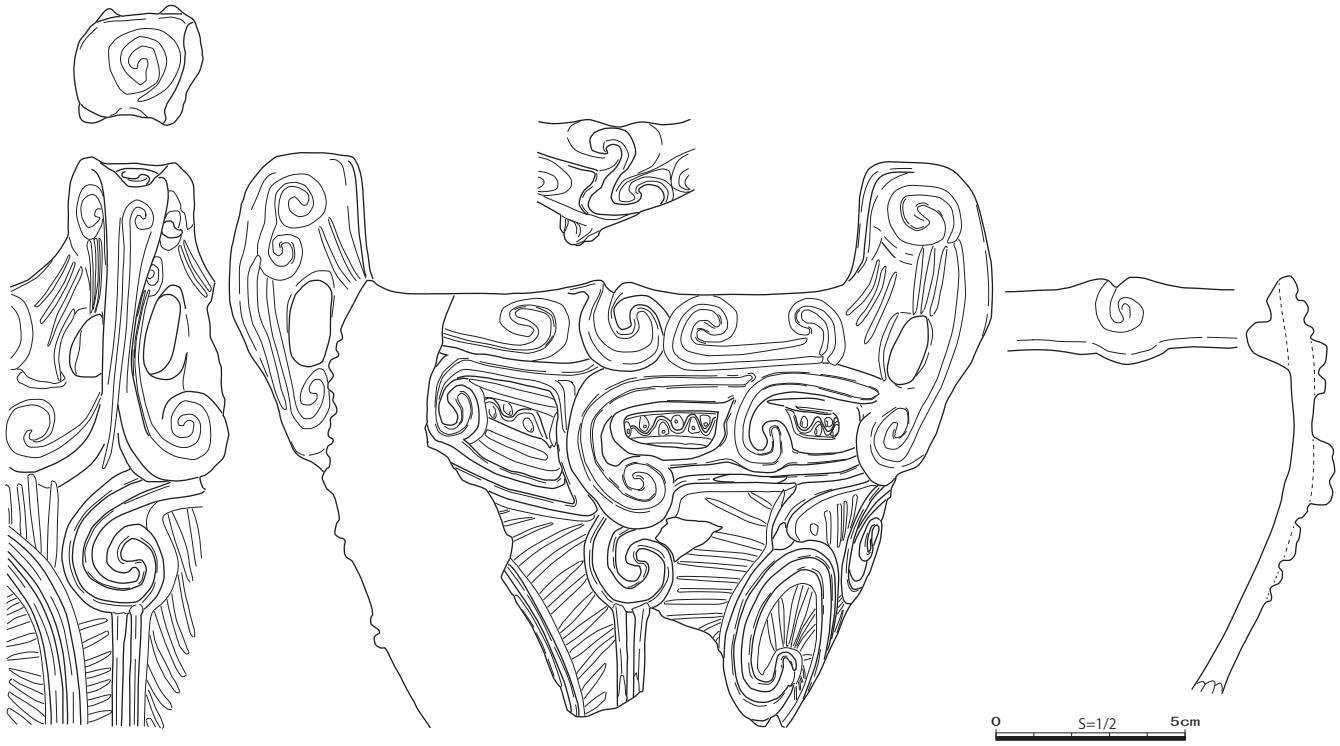
唐草文系土器の特徴は、大柄の渦巻文の他に、土器の口縁部に設けられる立体的な把手状の装飾や、樽形の器形などが挙げられます。

さらに細かい事では、大柄の渦巻文を描く手法が挙げられます。唐草文系土器では、棒状の工具を用い、土器の表面に３本一単位の線を彫り込んで表現するものと、２本一単位の線を粘土紐の貼り付けで表現するものとがあります。特に後者は、貼り付けた粘土紐中央を、線状に彫り込み分割することで、２本一単位の盛り上がった線とする技法上の特徴があります。

大砂遺跡と唐草文系土器

豊田市下切町の大砂遺跡は、旭地区の中心地、小渡から 1.5㎞ ほど東方に位置します。矢作川が大きく蛇行する西岸の河岸段丘上に立地し、遺跡の北縁には矢作川の支流、阿妻川が流れます。矢作川を遡れば信州伊那谷、下れば豊田盆地を経て碧海台地・岡崎平野、阿妻川を遡り山越えすれば、美濃東部の土岐川盆地へと続く、いわば先史時代におけるヒトとモノの結節点となり得る場です。

そのせいもあってか、大砂遺跡は、縄文時代の一万年以上に渡る歴史の中でも、早期から晩期に至る遺物が確認され、縄文時代を通じて頻繁に利用された遺跡と言えるでしょう。



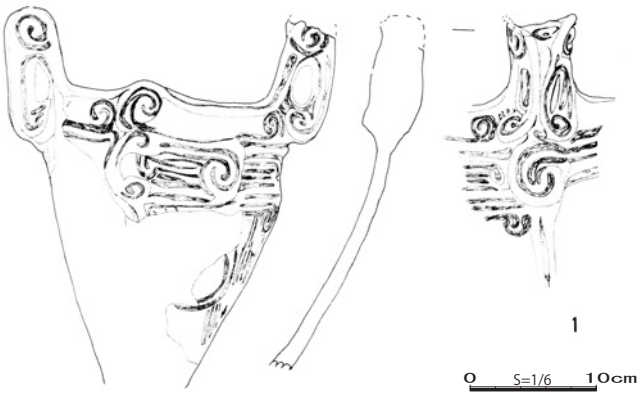
第１図　大砂遺跡出土の唐草文系土器

大砂遺跡の唐草文系土器について、過去に筆者が作成した実測図を掲載します（第１図）。口径 13.0 ㎝×残存部の器高 11.3 ㎝で、本場の唐草文系土器の口径（15 ～ 37 ㎝程度）と残存部の器高（16 ～ 42 ㎝程度）と比べると、最小の部類と言えます。また、先に記した文様構成や文様を描く技法は、唐草文系土器のルールをしっかり守っており、唐草文系土器の模倣品ではないことがわかります。大砂遺跡では唐草文系土器が多数出土している訳ではなく、主体は唐草文系土器と特徴を異にする在地の咲畑式系土器ですので、この土器は信州南部から運ばれた土器かと考えたくなります。現在、この土器については、その胎土について岩石学的な手法による産地推定分析を実施中ですので、その成果を期待しています。

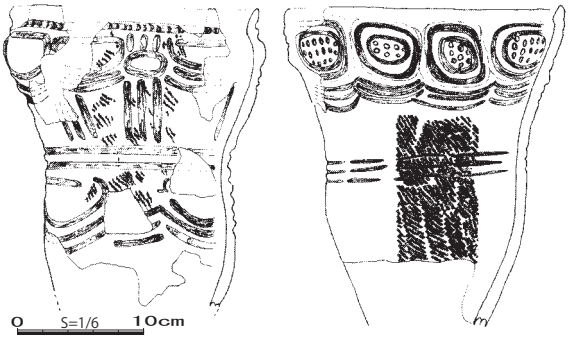
辻沢南遺跡の唐草文系土器

大砂遺跡の唐草文系土器と酷似した資料が、長野県駒ケ根市の辻沢南遺跡で出土しています（第２図）。そこでは、100 軒の竪穴住居が確認されており、大砂遺跡の縄文中期後半の竪穴住居が４軒であることを踏まえると、規模の差は明らかです。愛知県内の縄文中期後半の集落は、２～３軒の住居検出数が主体であり、交流のある地域間でも、遺跡（集落）の内容には歴然とした差が存在していることがわかります。

遺跡の規模や住居の数を単純に人口数に置き換えることは危険ですが、辻沢南遺跡のような長期に渡り高頻度で利用され続けた場所が、ヒト・モノ・情報を多く集積し、集団間の交換・交流の場となったことは間違いないでしょう。同遺跡では、豊田市内の遺跡で多数出土している、咲畑式系土器も少数ながら出土しており（第３図）、信州南部の大集落と、大砂遺跡など三河山間部の小集落との交流は、一方通行ではなく、双方向的だったことが窺えます。ただし、辻沢南遺跡



第２図　辻沢南遺跡出土の唐草文系土器



第３図　辻沢南遺跡出土の咲畑式系土器

の咲畑式系土器は、本貫地である愛知・岐阜県のものと比べると、かなり変容しているので、信州南部で模倣製作されたものなのでしょう。

辻沢南遺跡のような、大規模な遺跡がある地域と、大砂遺跡の縄文人が関わる動機は何か？ 例えば、市内で少数ながら出土する信州産の黒曜石などは、その動機の一つかもしれません。しかし、小さくて、かつ液体を入れることに適した土器を、わざわざ石材の輸送容器とするのは非効率であると感じます。

縄文人の結婚相手

「交換」という観点で考えると、人口密度の低い先史時代において、新たな遺伝子の獲得は何より切実な課題だったでしょう。すなわち、近親婚を避けるための、パートナー（配偶者）探しです。近親者との婚姻が繰り返されることによる遺伝的なリスクは古くから知られており、それを回避するための（族）外婚は世界中の民族で確認されます。筆者は、小さくても真性の唐草文系土器が存在する背景には、縄文人の「嫁取り」「婿取り」事情があり、土器は、彼（彼女）の出自を示しているのではないかと考えています。

真性の唐草文系土器は、愛知県内であまり出土しません。大砂遺跡以外では、ヒロノ遺跡（大野瀬町）・水汲遺跡（上川口町）など、三河山間部の矢作川流域の遺跡が多く、万加田遺跡（荒井町）が、筆者の知る最も南部の出土例です。

人類学では、集団が結婚相手を求める地理的範囲を「通婚圏」と言います。日本の近世において、通婚圏は、一般的に村落から約 10㎞ 程度と言われます。それを踏まえると、縄文人は、私たちが想像する以上に広い通婚圏を有し、地縁・血縁を超えたハイブリッドな結婚？ もしていたのではないでしょうか。

本稿を執筆するにあたり、長田友也氏にご教示をいただきました。お礼申し上げます。　（髙橋健太郎）

復元された戦国時代の山城、足助城

紅葉で有名な足助の観光名所、香嵐渓をご存じの方は多いと思いますが、そのすぐそばにある山城、足助城はご存じでしょうか？

今年６月、中京テレビ「キャッチ」の春風亭昇太さん出演「オモ城さんぽ」で、足助城が２回にわたり特集されました。10 月にはラジオ DJ でタレントのクリス・グレンさんに足助城の魅力を熱く語っていただくイベントが開催され、今、足助城にブームが訪れています。

解説するクリスさん

今回はお城好きで知られるお二人をとりこにした足助城の見どころをお伝えします。

足助城とは？

足助城は、戦国時代に足助鈴木氏が標高 301 mの真弓山山頂に築いた山城で、山頂の主郭部を中心に、四方の尾根に曲輪が張り巡らされていました。この城をめぐり、武田信玄、徳川家康らが戦いました。最終的に足助鈴木氏は徳川方につき、天正 18 年（1590）の家康の関東入封にともない足助を離れ、足助城は廃城となりました。

足助城再建に向けた発掘調査が、平成２年（1990）から平成５年にかけて行われ、足助鈴木氏の時代に相当する建物跡 13 棟、遺物が発見されました。そして平成５年に、日本で初めて詳細な発掘調査に基づいて復元された戦国期の山城、城跡公園足助城としてオープンしました。

足助城の見どころ

足助城には多くの見どころがありますが、その中でもおすすめのポイントを２つ紹介します。

①復元された屋根の工法の違い

足助城には南の丸の厨（くりや）をはじめ５棟の建物が復元されていますが、これらの建物は発掘調査の結果をもとに忠実に復元されたものです。まず、調査の結果から瓦の出土が確認されないため、瓦葺きの建物はなかったと考えられます。次に南の丸の建物跡では、人頭大の石が複数確認されています。この結果から、南の丸では石置き屋根の建物があったと判断されました。

南の丸　石置き屋根

本丸　柿葺（こけらぶ）きの屋根

一方、本丸の高櫓（たかやぐら）では、南の丸のように石は確認されないため、石置き屋根ではないと判断されました。また、高櫓は城主の権威を示す建物であるため、西の丸の物見台のように当時一般的であると考えられる茅葺きではなく、柿葺きで復元されました。

このように足助城の中で、当時の建築工法を見比べることができます。

②足助城からの眺望

足助はかつて、尾張・三河と信濃を結び、塩などの生活物資を運ぶ伊那街道の拠点でした。そのため、足助城は街道を進軍してくる敵を監視する重要な役割を担っており、このことが、幾度も戦いが起きた原因にもなりました。

高櫓から見る町並み

本丸の高櫓は展望台になっており、足助の町並みを眺めながら、街道を進軍する武田軍や物資を運ぶ様子をリアルに想像できるスポットです。

足助城にはまだまだ見どころがありますが、歩くのも大変な狭い道、急角度の坂道など、体感しなければ伝わらない魅力もたくさんあります。

また、城下に見える足助の町並みは、国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定され、令和３年６月には選定 10 周年を迎えます。

戦いの緊迫感を感じられる足助城、江戸後期からの商家が残る重伝建の町並みの両方を楽しめる足助にぜひお越しください！

（安藤由真）

足助伝統的建造物群保存地区に残る文化財

忘れられた「足助町道路元標」

「道路元標（どうろげんぴょう）」という言葉を聞いたことがありますか。東京・日本橋に「日本国道路元標」があるのをご存知かもしれません。江戸時代、日本橋は東海道をはじめ全国へ通じる街道の始まりとされました。明治 44 年（1911）、日本橋に「東京市道路元標」が設置され、昭和 47 年（1972）に「日本国道路元標」と名前を変えました。現在も国道 1 号などの起点になっています。

それでは、足助の町並みに残る「足助町道路元標」とは、どのようなもので、いつ、どこに設置されたのでしょうか。それは、高さ 60 ㎝の花崗岩製の石柱で、約 100 年前に足助伝統的建造物群保存地区（以下「重伝建」）のほぼ中央の田町の、豊田信用金庫前の飯田街道（中馬街道）の道端にあります。

写真 1

写真 2

足助町道路元標（豊田信用金庫足助支店前）

「道路元標」は大正 8 年（1919）4 月制定の旧道路法で道路の附属物と定められました。この法律は主に道路の建設や管理に関する規制を統一するものでした。同年 11 月の旧道路法施行令では、道路の起終点として各市町村に道路元標を 1 個置き、その位置は県知事が定めました。また、大正 11 年の内務省令「道路元標ニ関スル件」で、その大きさは 25 ㎝角、高さ 60㎝ で、石材その他耐久性材料を使用することとしました。足助町道路元標もこの規格どおりであるので、遅くともこの頃までには設置されていたのでしょう。なお、この頃の自動車の登録台数は、全国で大正 10 年では 1 万 1 千台、昭和元年では 4 万台と増えています。

愛知県知事は大正 9 年 2 月に、「足助町道路元標」の位置を東加茂郡足助町大字足助字田町 19 番地先（現・豊田市足助町田町 19 番地先）としました。一般的に役場の近くに設置されることが多く、足助町も江戸時代に陣屋であった場所に役場と郡役所があり、その近くの街道の一角に設置されたのでしょう。道路元標（写真 1）をみると、車などが擦（こす）ったような跡があります。100 年間場所を変えることなく、足助の人や自動車、自転車、荷車、荷馬車などの往来を見守ってくれていたのです。

道路元標を指定文化財に指定して保存している都市もあります。また、民芸運動の創始者・柳宗悦は「古きを守るも開発なり」という言葉を残しています。私たちは「足助町道路元標」を大切に守っていくとともに、これからの 100 年も、位置を変えることなく「足助町道路元標」には人や車両の往来、さらには重伝建の保存修理により足助の町並みが整備され、町の賑わう様子を見守ってほしいと思います。

尾張・三河から信州を結ぶ飯田街道の中継地として栄えた足助町の町制施行は、明治 23 年で、挙母町よりも 2 年早く、かつての町の勢いや賑わいが想像されます。

足助の町並みを歩く際にはぜひ探してみてください。

なお、豊田市域で道路元標が設置された町村は以下のとおりです。（＊現在の有無を注記）

○碧 海 郡　高岡村（有・高岡中学校に移設）
　　上郷村（？）
○西加茂郡　挙母町（有・郷土資料館に移設）
　　保見村（有・保見交流館に移設）
　　猿投村（有・猿投支所）
　　藤岡村（有・藤岡飯野町）
　　小原村（有・下仁木町）
　　石野村（有・石野町）、
　　高橋村（有・寺部町）
○東加茂郡　足助町（有・豊田信用金庫足助支店前）
　　松平村（有・久九平町）
　　下山村（有・下山支所に移設）
　　旭　村（有・余平町）
　　盛岡村、賀茂村、阿摺村（？・昭和 30 年足助町に合併）
○北設楽郡　稲橋村（？・昭和 15 年武節村と合併し稲武町）
　　武節村（有・武節公民館・昭和 15 年稲橋村と合併し稲武町）

（児玉文彦）

国産自動車創世期と家族の記憶
―歯車の技師・若松辰治氏とその家族―

記憶を集め続ける博物館として

令和２年度は、新たな博物館整備に向け、設計や資料収集・整理を進めています。その中でも特に重視しているのが、いわゆる「記録による歴史」と現在とを結ぶ存在、つまり今を生きる我々の記憶そのものです。今夏、自動車産業に尽力した一家の歴史を物語る礼服や家族宛の手紙、自動車関連書籍、特許取得に関わる賞状など、上記の視点でとても興味深い資料をご寄贈いただくことが出来ましたのでその一部を紹介します。

親子二代で自動車産業に携わる

資料寄贈の申し出をいただいたのは、藤岡地区にお住まいの若松敏郎氏。父の辰治氏と同じくトヨタ自動車の社員として長くご勤続され、平成３～15年は、藤岡町議会議員の役職も果たされていました。

敏郎氏の実兄お三方も自動車産業に深く関わり、久人氏は様々な特許取得、義人氏はトヨタ生産方式の普及と異業種への導入に尽力、著作を多く残し、雅人氏はトヨタ車体生産管理部門に勤められました。「自分は父との思い出はほとんど無いけれども」と、にこやかに話す敏郎氏からは、以下のようなお話と、父君に関わる文献についてご教示いただきました。

歯車に心血を注いだ生涯

宮城県仙台市に生まれた若松辰治氏（1904~45）は、東北帝国大学で工学を学び、トヨタ自動車の創業者である豊田喜一郎氏の要請により、当時勤務していた東北帝国大学を辞し、豊田自動織機製作所自動車部に着任しました。歯車の権威として知られる成瀬政男氏の著書『歯車と私』（1978）では、辰治氏を「自動車用歯車の技術・技能では、そのころ、その右にでる人はいないとまで、うたわれた人物」と評しています。成瀬氏は、同書に「豊田喜一郎さん」という節を設け、喜一郎氏の「あなたの歯車理論と技術とを、私たちに教えてください」という言を引用しており、喜一郎氏との深い関係性が窺えます。

昭和20年（1945）12月10日。辰治氏41歳の時のことです。辰治氏の手掛けた新しい歯車装置の報告を受けた、当時副社長を務めた赤井久義氏（1881~1945）は、その装置を実装した車輛での試走を希望し、若松・赤井・成瀬の３氏で、挙母から刈谷へ向かいました。その帰路、豊田市大林町で３人を荷台に乗せたトラックが横転。成瀬氏は一命を取り留めましたが、若松氏と赤井副社長は命を落としました。

辰治氏が妻子を残しこの世に別れを告げたその時、敏郎氏はわずか２歳。ご寄贈いただいた昭和20年２月１日付の東京から家族へ宛てた書簡には、「寒い毎日で小供達は大変でせうね。久人、義人、雅人、祝ちゃん、敏ちゃん、皆元気ですか。」と記されており、子煩悩な辰治氏の人物像が偲ばれます。

辰治氏のモーニング

ご寄贈いただいた資料の中で、特に印象深いのは、当時の辰治氏の上司であり、後にトヨタ自動車工業株式会社取締役社長に就任する豊田英二氏（1913~2013）の結婚式（昭和14年）に着ていくために新調されたと伝わるモーニングです。仙台市内で新調したとされ、実際に着用した上着、コールズボン、ウェストコートの３点セットで、黒の落ち着いた色合いの重厚な布地で仕立てられています。

若松氏からいただいた80点余の資料からは、国産自動車創世期の人物像と共に、親子二代に渡る家族の記憶が伝わってきます。（村松裕南）

辰治氏のモーニング

オンライン授業の可能性

～臨時休校等に備えたオンライン教材「シリーズ 親子で一緒に学ぼう」の活用から～

なぜ、郷土資料館がオンライン教材の作成？

「臨時休校中の学習教材をつくりたいのですが、学校では著作権の関係で使用できる教材が限られ、子どもたちの興味・関心を高める工夫がしづらいため、郷土資料館の資料を貸していただけませんか？」

４月上旬、ある先生からこのようなお問合せがありました。先生は、子どもたちに寄り添って興味・関心を高めようと考えていました。このような熱心な先生に共感し、郷土資料館として子どもたち、先生方のお役に立ちたいと考え、オンライン教材の作成に着手しました。

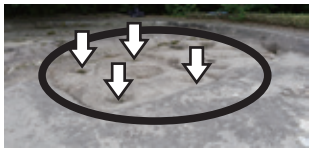
郷土資料館の基本方針

郷土資料館では、以下のような基本方針でオンライン教材を作成しようと試みました。

① 親子で話しあいながら学ぶことができる教材を作成する
② 正解を導くのではなく、その学習過程を通じて子どもの興味・関心を高めることを目的とする
③ 博学連携に生かすための試行的取組とする

好奇心に火をつけることができたならば、子どもは息の長い、深い学びを行います。したがって、親子で対話しながら学びあうことで、子どものこころに火をつけることを大きな目的としました。

親子で一緒に学ぶ 「社会科 - 縄文時代・弥生時代 - 」 - ある家族のエピソードから見えてきたこと -



曽根遺跡公園　竪穴住居跡

「左の図は縄文時代の住居跡ですが、⬭で囲まれた中の⇩が示した穴は何のためのものでしょうか？」

親子で想像をはたらかせて対話しながら考えました。

子：「家って、どうやって立っているのかな？」
親：「うちの家には支えるための何かがあるよね」
子：「柱ってこと？」

回答として左の写真を示すと、穴は柱を立てるためにあったことを理解しました。すると、子どもは次のような疑問をもちました。

子：「縄文時代はどんな家だったのかな？」

曽根遺跡公園　復元竪穴住居

そこで、次のような写真を提示しました。

すると、子どもは「家の中はどうなっているのかな？今の家との違いは何だろう？」と新たに疑問をもちました。

そこで、家の中の様子を見てみることにしました。それが次の写真になります。

穴に柱を立て、木を組み合わせて家を建てている様子がわかります。そこで、「今の家と違って、なぜ地面を掘っていたのでしょうか？」と質問しました。

親子で縄文時代の生活様式を想像しながら対話が弾んでいきます。

子：「部屋を大きくするためかな？」
親：「そうだったら、横に広げるんじゃないの？」
子：「あ！雨漏り対策のためじゃない？」

縄文人は、地面を掘ることで外の気温の変化を受けにくくする工夫をしていたと考えられます。

子どもは、親子で一緒に対話しながら学校では教わらない「縄文人の知恵」を学ぶことを通じて、縄文時代をもっと学びたいと思い始めたのです。

親子で疑問を共有しながら、縄文時代に思いをはせる素敵な時間をもつことができたそうです。

博学連携にむけて

４月から５月にかけて郷土資料館では、３種類の学習教材を作成し、豊田市小・中・特別支援学校 104 校へ情報提供しました。

（仮称）豊田市博物館開館後、博物館と学校がオンラインでつながり、学校で来館前の事前学習を行うことができれば、より充実した博物館を活用した学習を行うことができるでしょう。

おわりに

■親の声　先生の声

親　「子どもが縄文時代をもっと知るために曽根遺跡に行きたいと話していました」

先生「視点を変えた教材であり、子どもたちに大きな刺激となりました」

■利用校／人数　のべ 27 校、2,582 人

■今後の展望

今回は「学習教材」に焦点化したオンライン授業の可能性を探りましたが、今後は双方向で学習可能なオンライン授業の可能性を探っていこうと考えています。

ある先生からのお問い合わせから始まった本企画が、少しでも先生方、保護者、そして子どもたちのお役に立てたならばうれしい限りです。

（山岸　怜）

省営（国鉄）バスの記憶

【寄贈資料　国鉄バス運転手帽子】

【国鉄バス運転手帽子の動輪マーク】

発見館企画展「開業100年 三河線挙母駅」の中で、日本初の鉄道省営バス岡多線について調査を進めています。鉄道省営バスとは、旧国鉄・現在のJ Rバスのことです。今年の12月20日で、開業からちょうど90年を迎えます。

豊田市に残る「省営バス1号車」の写真の謎、開業当時の運行ルートなど、調査を進めるに従って多くの事実が判明してきました。その中で、最も魅力的だったことは、元国鉄バスの運転手をされていた大津建男さんとの出会いでした。

大津さんは豊田市富田町のご出身。高校卒業後、昭和34年（1959）、国鉄に就職されました。国鉄バス・トラック・高速バス運転手を経て、新幹線の営業課長としてご活躍され、昭和53年には愛知県本部から無事故表彰を受けています。

大津さんが運転手としてハンドルを握っていた車両は、ツバメのマークの国鉄バスでしたが、この地域の多くの人々は開業当時からなじみの「省営」と呼んでいました。また、この度大津さんからご寄贈いただいた「国鉄バス運転手帽子」には、省営バスのラジエターグリルと同じ「動輪マーク」が輝いています。

この帽子にも数々の省営バスの記憶が宿っています。大津さんは、目を輝かせながらこの貴重な記憶をお聞かせくださいました。一部をご紹介します。

入社したころは、「名金線さくら道」で有名な佐藤良治さん※（国鉄職員）と出会い、仲良くさせてもらったね。荘川桜の苗木を見せてもらったのを思い出すよ。

※佐藤さんは名古屋～金沢間のバス路線に桜を植樹した方

瀬戸の町は発展していて、空は真っ黒だった。月末になると人がたくさん遊びに来ていて、バスのドアを閉めずに走ったよ。だから、ある時、車掌が客といっしょに田んぼに落ちたこともあったなあ。

南豊田駅でもそうだったが、昭和40年頃は、トヨタ自動車に入社するために、多くの若者が乗降したねえ。一日に、布団を20個も積んで走ったのを覚えてるよ。逆に布団を持ってバスで帰る人もおったなあ。

【入社当時の大津さん】

80歳を超えた大津さん。今も矢作川漁協の仕事やテニスを楽しんでいらっしゃいます。　（伊藤俊満）

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間　午前９時～午後５時
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状線「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.109
令和２年１２月４日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471- 0079 豊田市陣中町 1-21-2
TEL. 0565-32-6561　FAX. 0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com/
FB●https://m.facebook.com/toyotarekihaku
※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。